

## 古典の日絵巻 [第四巻:琳派400年]



「牛図」(部分)  
俵屋宗達画・烏丸光広賛 頂妙寺蔵



「鶴図下絵和歌巻」(部分)  
本阿弥光悦書・俵屋宗達画 京都国立博物館蔵

### 第4号：平成26年8月1日 琳派と御所 —— 3

前回、後水尾天皇が古典研究に関心を持たれ、御所伝授が誕生したことを述べましたが、天皇はさらに巷の芸能にも深い関心を示しておられました。俵屋宗達の仕事ぶりについても興味を持たれ、宗達の金屏風を手許に置き、愛用されていたことが知られています。

後水尾天皇を中心に展開した宮廷文化の影響は琳派にも及んでいます。光悦は、近衛信尹(このえのぶただ)、松花堂昭乗(しょうかどうしょうじょう)とともに寛永の三筆と呼ばれ有名ですが、光悦の事績を伝える『本阿弥行状記(ほんあみぎょうじょうき)』には「…少しはかく事を得たりといへども、中々其妙にいたらざれば…」と松花堂に語っていますから、絵を描くこともできたようです。素養として書画の心得があったといえます。

わが国では古くから「琴棋書画(きんきしょが)」ということが教養として求められてきました。『源氏物語』の主人公・光源氏がこの四つの芸に通じていたと紫式部は記しています。光悦もまた四芸を身に着けますが、すべてに「其妙にいたらざれば」という言葉が示すように光悦の人柄があらわれ謙遜した奥ゆかしい姿勢をとります。

現在は否定されていますが、宗達・光悦同人説も出されていました。しかし、鶴図下絵和歌巻の中で柿本人丸(人麻呂)の歌を書くとき「人」の文字を後から書き加えています。この光悦の姿は、宗達が自ら「宗達法橋」と書いている宗達の姿が想起されてきます。兩人の間に、些細なことに拘らない、どこかゆったりとした大らかでユーモラスな器量が感じられ、琳派の特質の一つに「大らかさ」を挙げることができるでしょう。

